The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Nomadic Imagination : Literary Form and the Politics of “Displacement” in D.H. Lawrence’s Later Works
Author(s)	水田, 博子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55682
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　水田　博子　）	
論文題名	Nomadic Imagination: Literary Form and the Politics of “Displacement” in D. H. Lawrence’s Later Works （ノマド的想像力：D. H. ロレンスの後期作品における文学形式と「位置ずらし」の政治学）

本論文は、Lawrenceが後半生、イギリスを離れて海外を放浪したこと、および、近代的主体が前提とする思考を乗り越えようとしたことを、西洋的意識の外部に到達しようとする彼の「位置ずらし」displacementの行為とみなし、こうした空間的、精神的displacementの経験がどのように彼の想像力を刺激し、新たな文学言語と文学形式を生み出していったのかという観点から彼の後期作品を新たに読み直そうとするものである。Deleuze, Guattari, Lingis, Agambenらの現代哲学の理論に依拠することによって、時代への応答という歴史的な視点と、時代を越えて現代にまでつながる普遍的な問題提起の交差する地点でLawrenceの作品を論じ、そのモダニズムの時代への美学的かつ政治的応答の今日的特徴を明らかにするものである。

Lawrenceの作品は一般に、初期と後期の間に大きなギャップがあると言われる。炭鉱夫の家に生まれ、彼らの暮らしぶりやその共同体について肌で感じ取られる環境にいた彼の初期の作品は、労働者階級の生活と心理をそこにいた者にしかわからない感覚を持って描きだし高く評価された。しかしその後第一次世界大戦を経て、彼の作風は「労働者階級の小説」という枠組みをはずれ、「生の倫理」を描くことにシフトしていった。それ以後小説の形式はリアリズムを離れ、小説の主人公たちの生は、同時代的な歴史の中で翻弄されるものとして描かれるよりはむしろ、生の存在論的な問いの中に投げ込まれることになる。このように、階級という具体的でlocalなものに依拠していたものが、生の新たな次元というuniversalなものをテーマにしたことによって、Lawrence後期の作品は具体的な共同体における闘争を放棄し、恣意的で抽象的な非現実世界へ逃走するものであるとする解釈が生まれた。本論文がこのような後期作品にあえて焦点をあてるのは、そこにこそLawrenceの時代への応答が色濃く現れているからであり、彼独自の共同体への衝動、それを具現化しようとする文学的営為が、その行き詰まり、方向転換をも含めて研ぎ澄まされた形で見てとることができるからである。

こうしたLawrenceの立ち位置の変化をとらえる視点として本論文がまず提示するのは、Lawrence 後期の作品を特徴づける三つのキーワードであるdisplacement, exile, escapeという語をそれぞれ、Deleuze/Guattariが*Anti-Oedipus*および*A Thousand Plateaus*で用いたdeterritorialization(脱領土化), nomad(ノマド), a line of flight(逃走線)という概念によって再定義することである。この視点によってLawrenceの作品は今日的な新たな意味を獲得することになる。たとえば、displacementという語は通常は、政治的、経済的要因によって強制的に居住地を追い出されるか、出て行かざるを得なくなる状況を表した言葉である。しかし実際にはLawrenceは強制されたわけではなく、自らすすんでイギリスを離れ、世界を放浪した。こうした状況にdisplacement/deterritorializationという語をあてはめることによって、こうした行為は常に流れ続ける欲望の流れを、固定化した形に当てはめようとする勢力への抵抗であると解釈することができ、「位置をずらし続ける」という行為の政治的意味が明らかになる。

ここで問題となるのは第一に個人の新たな存在様式であり、第二にそれに基づく新たな集団性、そして第三にそれらを表現する新たな文学形式である。Lawrenceにとって生の存在論的な問いの表現はもはや伝統的なリアリズムの表象では不可能であり、彼は新たな表現形式を模索し続けた。その結果がLawrence的モダニズムになったと言える。具体例を挙げれば、リアリズム小説の一分野であるBildungsromanは、主人公がさまざまな試練を経て自己を形成していき、最終的に社会に適応するまでが描かれるという形式を持つ。Lawrenceの小説はこうした小説にアンチを唱えるものである。彼が描く人物たちは社会が提供する自己形成の過程に疑問を抱き、そこに定住することを拒み、未知なるものへと自らを開くことによって、生の新たな次元を開こうとする。その際に重要になるのが自らの身体の衝動を肯定的にとらえ、無意識が生み出すものを創造ととらえる視点である。本論文ではLawrenceが描くこうした視点をdisplacementの経験と結びつけ、clichéを脱して新たな表現方法を獲得しようとする際に必要な想像力を「ノマド的想像力」ととらえる。また、抽象的な理想を前提にするのではなく、具体的な身体の未決定性を前提にした集団性というユートピア・ヴィジョンを、新たな政治性の追求として読む。こうした方法論によって目指されるのは、Lawrenceの思想と、それを小説という形式において具現化しようとする際の技法との関係の検証である。具体的には以下の三

つの点において検証を行う。

第一に、反ヨーロッパとしてのaboriginal Americaにおける宗教的感受性の可能性をどのように文学に持ち込んだかという点からの検証である。第一章と第二章では、Lawrenceのいわゆる「アメリカ小説」を分析する。第一章"The Woman Who Rode Away"の分析では、白人共同体からaboriginal Americaの部族共同体へ向かう場所の移動と連動して、主人公の自己意識がどのように変容していくのかを論じる。そこでは意識と無意識、思考と思考以前の状態、文明とprimitiveとの境界を渡る感覚、経験がいかに言語化されるのかに焦点が当てられ、物理的な空間移動が、新たな想像力を得ることと結びついており、それが西洋的価値観の転倒を要請すること、そしてその表現のためには寓話という形式が必要であったことが考察される。

第二章の*The Plumed Serpent*の分析では、西洋の他者としてのaboriginal Americaと西洋との関係を「他者の命令」という視点から考察する。西洋人女性である主人公がメキシコで、自らの思考の前提を覆すような翻訳不可能な他者と出会い、嫌悪と魅力という二律背反的な葛藤を経験するこの小説は、あいまいな結末と説明口調の語り口から、小説としては失敗作と見られてきた。しかしメキシコの古代宗教の復活に対する主人公のアンビバレントな反応とその自問自答を、Lingisの「異邦の身体」という概念によって読み直すことによって、自己に応答を強いる存在としての他者の問題を浮かび上がらせることができる。

次に、言語の物質性／身体性を通しての検証である。第三章、第四章および第五章では、いわゆる「指導者」小説の行き詰まりと男女間の「やさしさ」の関係への方向転換において、身体性の表現が言語の物質性とどのように関わっているのかを検証する。第三章の*The Lady Chatterley's Lover*の分析では、言語化を阻む身体の経験がいかに言語化されるのかという点に焦点が当てられる。ここではAgambenによるビオスとゾーエの関係を導きの糸として、社会的な個と生物的な個の間の境界線上において、ロゴスに取り込まれない言語がいかに「声」として表現されるのかが、Lawrenceに特有のsexualityの描写において考察される。

第四章では*The Escaped Cock*におけるキリスト教の「復活」神話の語り直しと、身体性の表現について論じる。Lawrenceによる身体の言語がキリスト教の文脈を離れて、東方神話の文脈の中に移されることによって、キリスト教的倫理が自然の倫理へと移し替えられる。Deleuze/Guattariによる「逃走線」という概念をあてはめることによって、自分の子供を妊娠した女のもとを去っていく結末を、生と死の連続した一つのプロセスを継続させようとする行為であると解釈し、こうした死生観を基盤とする関係性を、身体の言語によって表現していることが論じられる。

第五章ではLawrenceの絵画論の分析を通して、絵画、文学双方における身体性の表現の共通点を探る。20世紀初頭のモダニズムの時代には、印象派、後期印象派、未来派などさまざまな美術の潮流が現れたが、それらに影響を受けてLawrenceも自身の芸術観を作り上げていった "Introduction to These Paintings"では、cliché を避け、新たな文学表現を模索するLawrence自身の方向性が、Cézanneの批評を通して語られる。対象に対して身体的な直観を働かせることによってそのものが持つ精神性に到達するというCézanneの、そしてLawrenceの方法はオールタナティヴな唯物論とみなすことができる。

最後に、政治と言語の関係からの検証を行う。第六章では*Apocalypse*を詩的言語による政治のとらえ直しの視点から論じる。この作品では個と社会の関係、民主主義批判とユートピア思想、共同体のありかたなどが語られるが、本論文では特に、アレゴリーとシンボルという二つの修辞技法の対立に焦点をあてる。生を全体化しようとする欲望は、一つの語の意味を矛盾なく同定しようとするアレゴリー的な欲望と結びついているとLawrenceは主張する。こうした欲望が一枚岩的な政治イデオロギーを生産することに対してLawrenceは、シンボルの多義性による解釈の複数性を対置し、そこから生じるconflictを新たなものが生まれる源泉と考える。シンボルの多義性は詩的言語と結びつき、そこでは多くの解釈を生み出す想像力が重視される。このような政治のとらえ直しから、Lawrenceが前提とするものは史的唯物論ならぬ「詩的唯物論」であると言えることが示される。

Lawrenceの作品の一番大きな特徴は、人間も含めた物質の中に生気を読み取り、それを表現する言語なり形式を探そうとする点にある。物質自身が持つリズムや肌合いを重視することは、表現の対象だけではなく、表現媒体としての言語を重視することにもつながる。テーマとしての人間の身体性と、技法としての言語の身体性が密接に絡みあっているのである。また決して同じところにとどまらず、常に動いてやまないvitalityを追いかける想像力として、作者にも読者にもノマド的想像力が必要とされる。本論文は、Lawrenceがイギリスを離れて世界を放浪した「自発的亡命」の時期に書かれた作品においてこうした特徴がはっきりと表れることを、各作品の個別のテーマを通して明らかにし、それらはLawrenceが生きた時代への反応であると同時に、身体や物質への信頼、キリスト教の超越的価値への批判、翻訳不可能な他者との共生の可能性、新たな民主主義に基づく共同体への希求といった今日的問題にも通じるテーマであることを示し、現代のわれわれがLawrenceを読む意義の一端を明らかにするものである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　水田　博子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	服部　典之
	副 査	大阪大学　教授	片渕　悦久
	副 査	大阪大学　准教授	山田　雄三
		大阪大学　准教授	石割　隆喜

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　Nomadic Imagination:
Literary Form and the Politics of “Displacement” in D. H. Lawrence’s Later Works

学位申請者　水　田　博　子

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	服　部　典　之
副査	大阪大学教授	片　渕　悦　久
副査	大阪大学准教授	山　田　雄　三
副査	大阪大学准教授	石　割　隆　喜

【論文内容の要旨】

本論文はLawrenceが後半生に海外放浪により近代的主体が前提とする思考を乗り越えようとしたことを、彼の「位置ずらし」(Displacement)行為と捉え、この空間的・精神的Displacementが彼の想像力を刺激し、新たな文学を生み出していったという観点から、彼の後期作品を読み直そうとするものである。Lawrenceの前期作品は「労働者階級の小説」として高く評価されてきたことに対し、後期作品は先行研究では低評価なのだが、実は「生の倫理」を描く存在論的な問いに迫るものだと主張される。Lawrence 後期作品は恣意的で抽象的非現実世界へ逃走するものだとする先行研究に反論し、本論はそこにLawrenceの同時代への応答を読み込み、共同体への衝動とそれを具現化しようとする文学的営為を描く困難性を示しながらも、同時に方向転換を図る、より研ぎ澄まされた形での挑戦を見て取ろうとする。

Lawrenceにとっての「位置ずらし」は、彼の世界放浪とそれを作品にする行為により、常に流れ続ける欲望を固定化しようとする勢力への抵抗戦略であったと主張される。そのように既存の文学様式を離れ新たな表現を獲得する際に必要とされる想像力を、論者は「ノマド的想像力」という言葉で規定する。これは抽象的な理想を前提にするのではなく、具体的な身体の未決定性を前提とした集団性というユートピア・ヴィジョンを、新たな政治性の追求として読むものである。

第一章“The Woman Who Rode Away”の分析では、白人共同体からaboriginal Americaの部族共同体へ向かう場所の移動と連動して、主人公の自己意識がどのように変容していくのかが論じられる。物理的な空間移動が、新たな想像力を得ることと結びついており、それが西洋的価値観の転倒を要請すること、そしてその表現のためには寓話という形式が必要であったことが考察される。第二章の*The Plumed Serpent*の分析では、西洋の他者としてのaboriginal Americaと西洋との関係が「他者の命令」という視点から考察される。本作品を低く評価する先行研究と違い、メキシコの古代宗教の復活に対する主人公のアンビバレントな反応とその自問自答を、Lingisの「異邦の身体」という概念によって読み直すことによって、自己に応答を強いる存在としての他者の問題が浮かび上がった優れた作品だとする。第三章の*The Lady Chatterley’s Lover*の分析では、言語化を阻む身体の経験がいか

に言語化されるのかという点に焦点が当てられる。ロゴスに取り込まれない言語がいかに「声」として表現されるのかが、Lawrence に特有の sexuality の描写において考察される。第四章では *The Escaped Cock* におけるキリスト教の「復活」神話の語り直しと、身体性の表現について論じる。Lawrence による身体の言語がキリスト教の文脈を離れて、東方神話の文脈の中に移されることによって、キリスト教的倫理が自然の倫理へと移し替えられるとする。第五章では Lawrence の絵画論の分析を通して、絵画、文学双方における身体性の表現の共通点を探る。20 世紀初頭のモダニズムの時代には、さまざまな美術の潮流が現れたが、それらに影響を受けて Lawrence も自身の芸術観を作り上げていったとし、新たな文学表現を模索する Lawrence 自身の方向性が考察される。第六章では *Apocalypse* を詩的言語による政治の捉え直しの視点から論じる。この作品では個と社会の関係、共同体のありかたなどが語られるが、本章では特に、アレゴリーとシンボルという二つの修辞技法の対立に焦点をあてる。生を全体化しようとする欲望は、一つの語の意味を矛盾なく同定しようとするアレゴリー的な欲望と結びついているとLawrence は主張する。こうした欲望が一枚岩的な政治イデオロギーを生産することに対して、Lawrence はシンボルの多義性による解釈の複数性を対置し、そこから生じる conflict を新たなものが生まれる源泉と考える。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は Lawrence の後期作品を彼の空間的・精神的位置ずらし（Displacement）という観点から読み直し、それを「ノマド的想像力」というタームを使うことで論じた意欲的な論文である。論者の長年の研究によって一貫した興味と問題意識を持ち続けたことで、博士論文全体は統一感を持ち、Lawrence 後期作品研究に新たな側面から光を投げかけており高く評価しうる。

Lawrence の作品の一番大きな特徴は、人間も含めた物質の中に生気を読み取り、それを表現する言語なり形式を探そうとする点にある。物質自体が持つリズムや肌合いを重視することは、表現の対象だけではなく、表現媒体としての言語を重視することにもつながる。テーマとしての人間の身体性と、技法としての言語の身体性が密接に絡みあっているのである。また決して同じところにとどまらず、常に動いてやまない vitality を追いかける想像力として、作者にも読者にもノマド的想像力が必要とされる。本論文は、Lawrence がイギリスを離れて世界を放浪した「自発的亡命」の時期に書かれた作品においてこうした特徴がはっきりと表れることを、各作品の個別のテーマを通して明らかにし、それらは Lawrence が生きた時代への反応であると同時に、身体や物質への信頼、キリスト教の超越的価値への批判、翻訳不可能な他者との共生の可能性、新たな民主主義に基づく共同体への希求といった今日的問題にも通じるテーマであることを示し、現代のわれわれが Lawrence を読む意義の一端を明らかにするものである。

ただし本論にも欠点がないわけではない。ロレンスのノマド的衝動がプリミティブなトポスに向くとするが、神話的世界への逃走が西洋的価値観の脱構築に向かうとするのは、文明と非文明との二項対立の優劣を転覆させただけのように見える。またタイトルで Literary form とあるがそのフォームが Lawrence にとって小説であった必然性が説明されていない。また論者が重視する body も想定された「身体性」だけでなく、Lawrence の body 概念には物質性すべてを包含する意味があると思われるが、その分析がない。

ただし、このことによって本論の全体的価値が減ずるものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。